



教育推進室だより

第14号

平成29年12月15日
武蔵野市教育委員会
指導課教育推進室
電話 60-1241

武蔵野の人財を生かした教育への期待



教育委員（教育長職務代理者）渡邊 一衛

平成27年3月に成蹊大学理工学部を退職し、同年4月より本市の教育委員を拝命した。大学では主として生産システムの構築や改善を中心とした生産管理について教育研究を行ってきた。本稿ではその視点から武蔵野の人財の活用について考えていきたい。

経営工学における管理技術の1つにインダストリアルエンジニアリング（以下IEと記す）がある。これは、システムに含まれる「人、モノ、機械設備、お金、情報」を対象として、システムの「設計、改善、確立」に関する活動である。「設計」は、新たなシステムを構築すること、「改善」は現在あるシステムをよくしていくこと、「確立」は誰が行っても同じ結果が出せるように手順化・標準化することである。システムに含まれる対象として「人」から始まっているように、IEでは人を大切にし、同じ結果が出せるのなら楽な方法で出せるようにしていこうとしている。そのため私は「人財」という語を用いている。学習教育プロセスは、「まだ学んでいない子供たち」及び「身につけるべき知識・技術・態度・自己実現力など」をインプットとし、「学習・教育目標を満たした子供たち」をアウトプットとして、その間をつなぐプロセスとして捉えられる。このプロセスを進める資源として、「教職員、補助者、教具・教材、教育設備・建物、什器備品など」があり、それらの資源を用いて行う「学習教育方法」がある。そして、年度ごと、科目ごと、単元ごとに「計画」が立てられ、それに従って授業が「実行」される。システムのアウトプットである子供たちが満足した状態に達したかどうかの「評価」が行われ、更にこのシステム全体の「評価」が行われて、次の活動につなげるための「対策」が立てられる。いわゆるPDCA（Plan・Do・Check・Act）のサイクルが回ることになる。

さて、小中学校はこれまでも地域の皆様に支えられて成り立ってきた。プロセスのインプットである子供たち、プロセスを進めるための補助者としての保護者や関連諸団体の皆様、卒業生や近隣の方々のご尽力で学校が経営されてきた。しかしながら、力がありながら活動されていない多くの地域の方々がおられると思われる。そうした潜在力を活性化する方法として、各学校に「地域コーディネーター」が任命されている。各学校の方針の下で授業を支援していただく方を紹介いただくという試みである。地域コーディネーターは、地域の事あるいは地域の方々を知っていることが大切である。また、地域コーディネーター同士の連携も必要になる。地域コーディネーターの努力だけでは気づかない、学習教育プロセスの支援をしたい方の登録も潜在力の活用にも役立つ。また、周辺5大学の教員や学生の活用も考えられる。

今後の小中学校の学習教育プロセスでは、「主体的・対話的で深い学び」により「知識の理解の質を高め、資質・能力を高める」学習が必要とされる。このような状況の中で、地域の人財の支援は学習教育プロセスの中で大きな力を生み出すことになると期待される。

地域コーディネーターによる学校支援について

平成 29 年度第 1 回開かれた学校づくり協議会代表者会



宮崎教育長の開会挨拶

平成 29 年 10 月 25 日 (水) に市役所で開催しました。この会は、毎年 2 回、各校の同協議会代表者と教育長、教育委員、教育委員会事務局職員とが一堂に会して、教育委員会の諸事業についての共通理解を図るとともに、特定の課題について協議し、学校と地域が

連携して教育を推進していくことを目的として、平成 21 年度から開催しています。

代表者会の前半には、児童生徒数増加による諸課題や学区変更案等についての事務局報告が行われました。その後、平成 28 年度に各小・中学校に配置された地域コーディネーターについての協議をしました。地域コーディネーターである代表者から自身の活動や取組を紹介していただき、それを受けて今後の活動に対する要望や意見などを話し合いました。

現在、同協議会委員のうち 16 名の方が地域コーディネーターを兼務されています。その関係から学校との連絡や情報提供も順調に行われており、二小の银杏拾いや五小・四中での挨拶運動など、各校の実態に合わせた特色ある学校支援が行われているということが地域コーディネーターの報告からよく分かりました。また、地域と学校とのよい関係を大切にしつつ、地域コーディネーターが今後さらにどのように学校と地域を結び付けていくか考えていくことが大切である等の意見も出されました。

代表者の皆様からいただいた御意見等を踏まえ、学校と地域を結び付けていく地域コーディネーターの活動について、今後、さらに検討してまいります。

地域コーディネーターに対する多くの方の支援や御協力を、引き続きよろしくお願いたします。

国内初めての国際大会を武蔵野総合体育館で開催！

ジャパンパラボッチャ競技大会 (11月18日~19日)

市立小・中学校では東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会に向け、オリ・パラ教育を活発に進めており、児童・生徒の関心も徐々に高まってきています。

そのような中、昨年のリオデジャネイロパラリンピックで日本チームが銀メダルを獲得し、注目度が急上昇している「ボッチャ」の国際大会が武蔵野総合体育館で開催されました。当日はリオ大会で金メダルを獲得しているタイ、古豪イギリス、そして日本が 2 日間にわたって熱い戦いを繰り広げました。世界のトップが集まり開催されたこの大会では、第一小学校、大野田小学校の児童 21 名がエスコートキッズの役割を担い、大会を支えました。子どもたちが少し照れながらも一所懸命に役割を担う姿は微笑ましく、会場からは大きな拍手が贈られました。パラリンピック選手を間近に感じたこと、国際大会の運営の一端を担ったこと、この体験は子どもたちの心に長く残る貴重な機会になったことと思います。

大会の注目度は高く、当日の様子はテレビのニュース番組や、多くのネットニュースなどでも取り上げられました。



日本対タイの試合



がんばるエスコートキッズ

第12回むさしの教育フォーラム

「これからのICT教育と学校・家庭・地域で考える情報モラル教育」

平成29年11月4日（土）に武蔵野スイングホールにて「第12回むさしの教育フォーラム」を開催いたしました。本フォーラムは、本市の学校教育に対する市民の方々の関心を一層高め、学校・地域と連携した質の高い学校教育を推進することをねらいに、年1回実施しているものです。今回は、本市のICT教育の推進状況、小・中学校における取組の紹介、情報モラル教育に関する講演を通して、急激に進展する情報社会の中で生きる子どもたちを、学校・家庭・地域が連携して見守り育てる方策等について共通理解を図ることを目的に行われました。



斉藤秀司第二中学校長による発表

第1部で本市におけるICT教育の取組状況を説明した後、第2部で大野田小学校と第二中学校から、タブレットPCを活用した教育活動や情報モラル教育の取組などを発表していただきました。

また、第3部では、講師にお招きした静岡大学教育学部准教授 塩田真吾氏より、「児童・生徒が主体的に考える情報モラル教育—学校・家庭・地域の連携—」をテーマに、「情報モラルの問題を自分のこととして自覚させること」「SNS等の家庭ルールの必要性や家庭ルールの運用方法を考えさせること」など、情報モラル教育の指導のポイントを、カード教材を使った演習を交えながら御講演いただきました。



カード教材を使った演習

講師の塩田先生のお話や参加者の皆様からいただいた御意見を踏まえ、今後もICT教育及び学校・家庭・地域が連携した情報モラル教育を一層推進してまいります。



ワンタッチテント

教育推進室

学校共用貸出備品



大型拡大プリンター

各校に常備していないが年に数回必要となるものや、各校ごとに備えるには高額である機材や備品の管理・貸出も、学校が教育推進室に期待する機能の一つとなっています。

教育推進室が開室してから3年目となり、すでに、プールロボットやワンタッチテント等を購入し、貸し出しを行っています。使用日や使用期間が重複することも多く、各校の御希望どおりに貸出ができないこともありますが、各校の希望を調査し、有効な機材や備品等を揃えています。



プールロボット

今年度は、研究発表会の横断幕や懸垂幕、教室掲示用の拡大時間割表

などを簡単に作成し印刷できる大型拡大プリンターを購入しました。学校での掲示物作成等の簡素化が図れるものと思います。

今後も学校の要望や状況等を把握し、機材や備品等を揃え、予算の有効活用とともに、教員の多忙化解消に少しでも寄与できればと考えています。



スリッパ

世界ともだちプロジェクト シリーズ 地域コーディネーター活躍中! & はじめての検定試験

～学校と地域の連携 <その2>～

【世界ともだちプロジェクトの推進】

関前南小 地域コーディネーター 島田 豊文

5月、ペルー・ナイジェリア・オマーンの方で、全校朝会の時に15分程度、お国の話をしていただける人を探してほしいとの依頼を受けました。武蔵境にあるMIA事務所に相談に伺いましたが、該当の国の方に会うことができませんでした。その後、近所に外国人の方がいらっしゃる事が分かり、直接お話をお聞きしたところ幸いにもペルー出身の方でしたので、今回の趣旨を話し、依頼しました。ご本人からその時間帯は仕事をしているので上司の許可をいただかないとできないとのことでしたので上司に直接お会いし、快諾を得ることができました。

10月16日の全校朝会ではスペイン語でのあいさつで始まり、ペルーの衣装・食事・文化遺跡等のお話、そして最後に「コンドルが飛んでゆく」をピアノ伴奏付きで聞かせていただきました。地域の方々の協力を得ながら地域コーディネーターとしての役割を果たすことができました。

【漢字検定・数学検定】

第四中 地域コーディネーター 寺島 芙美子

他校で検定試験を行っていること、受験をするため遠方まで行かなければならないことを知り、地域コーディネーターとして四中で検定試験を行うことで協力したいと思いました。募集してみると、多くの生徒の反応に嬉しい悲鳴となったのですが、初めての経験でしたので説明を間違いないか、手続きは間違えていないか、心配事は尽きませんでした。検定協会に頻りに連絡を取り、学校側の協力を得て当日を迎え、支援者の協力も得て無事終了。



数学検定の試験

未だ試験の結果が出ていませんが、学校側の感謝の言葉に動かされ、皆の協力を得ながら、今後も継続したいと思っています。多々あった反省を生かしながら…。

～地域で活躍している団体紹介 <その13>～

出前授業いたします

NEC ネットエスアイ株式会社「南極くらぶ」

～見よう・聞こう・触ろう～

「南極くらぶ」は南極越冬隊経験がある当社社員が講師となり、南極の自然やそこでの生活を伝える出前事業です。

NECグループは、1971年の第13次隊から延べ45名の社員を南極地域観測隊の隊員として国立極地研究所へ継続して派遣し、人工衛星のデータや宇宙からの電波を受信するシステムの運用・保守点検を担当しています。

授業では、南極で見られる大自然（オーロラ、ブリザード）や動物（ペンギン、アザラシ）などの写真・動画をふんだんに盛り込み、クイズを交えながら児童の目線で双方向の授業を行います。また、環境問題（ゴミの処理や温暖化）や極寒の地での実験（シャボン玉はできるか？）などについても動画を映しながらお話をすることで、南極についての興味と関心をもってもらえるようにしています。さらに「国立極地研究所」の協力により、『南極の氷』、『南極で使用する防寒着』、『ガイドブック』などの提供を受け、1～2万年程前に降った雪が固まってできた南極の氷に触れ、その溶ける音を聞き、防寒着を着用するなどを体験する授業を行います。



越冬隊員が着ていた
防寒着の着用体験

2時限分（45分×2）を基本に土曜日などの学校公開日にも対応させていただきます。保護者の皆様にも是非ご一緒に受けていただきたい授業です。

【お問合せは NEC ネットエスアイ(株)CSR コミュニケーション部】

担当：鈴木・松下 電話：03-6699-7004 E-Mail：csr-sk@dm.nesic.com / 教育推進室：0422-60-1241

次号は3月15日に発行予定です。推進室だよりにお気づきの点やご意見がありましたら、教育推進室までお寄せください。